



広島市生まれ。被爆二世。作品は児童書から一般向けまで多岐に渡り、受賞多数。ヒロシマを描いた作品には『八月の光』(小学館)、『光のうつしえ』(講談社)、『彼岸花はきつねのかんざし』(学習研究社)がある。『光のうつしえ』英語版『Soul Lanterns』は、今春ペンギン・ランダムハウス社より世界に向けて刊行されることに。

今日という日は、残りの人生の第一日目

と

ても若かったころ、文字通り「泣きっ面に蜂、また蜂、またまた蜂」みたいな時期があった。

そのとき、かけていただいたことばのなかで何故か心にさっぱり響かなかったのが、「明けない夜はない、やまない雨はない」だった。ずいぶんイージーな慰めだと思ったのである。考えてみればなかなか深いことばで、後に拙著でも引用したくらいだ。だが当時はその深さがわからなかった。

(若気の至りとは、こういうことをいう)。

逆に心に残ったのが、「今日という日は、あなたの残りの人生の第一日目」ということばだった。アメリカ人の老シスターから励まされたのだが、英語では簡潔に「Today is the first day of the rest of your life.」となる。

言われて、アメリカ映画の一場面を思い出した。洗面台の鏡にこのことばが貼ってあって、主人公が歯を磨きながら眺め、ずれた紙をまっすぐに直したりする。泣きはらした顔を洗ったあと、じっと見つめたりも

する。小説でも出てきたし、友人が口にするのを聞いたこともある。どうも、このことばに励まされて「今日から、また頑張ろう」と思っている人たちは、たくさんいるようだった。だれもが何かしら重い荷物を抱えて生きているのである。

子どもは明日を夢見て眠り、大人は今日の苦しみや悲しみを癒やすために眠る、という。だが眠りだけではとうてい癒やせない悩みや悔いも多々ある。

しかし、もし新しく始まる日を新たなスタートと捉えることができるなら、明るい気持ちで朝を迎えることができるかもしれない。

「今日という日は、あなたの残りの人生の第一日目」とはすなわち、「いつでも新しいスタートを切れる」「今日から、また生き直せる」ということだからである。

春がまた巡ってくる。夜も必ず明ける。希望とともに「第一日目」に踏み出せますように。